

徒然草（現代語訳）（二）——女性・恋愛論

訳 定武禮久

● 恋に悩まない男はあじけない

〔第三段〕 万事にすぐれていても、恋愛の趣きを解さないような男は、甚だ物足らず、折角の美しい玉の盃に底がないような思いがするに違いない。夜の露や霜に萎れる思いをし、あてどもなく彷徨い歩き、親の意見や世間の非難などに気を配る余裕もなく、あれこれと思ひ乱れ、そのくせ、とかく独り寝することが多くて、まどろむ夜もないというようなものこそ、かえっていいのである。

さりとて、ひたすら恋に溺れるというのではなくて、女からはお安くはないように思われるのが、望ましい姿といえよう。

● 色香は、仙人の神通力をも失わせる

「第八段」 世の中の人の心を迷わすことでは、色欲に及ぶものはない。人の心というものは、愚かなものだ。「におい」などは、かりそめのものではないか。それにもかかわらず、一時的に衣裳に香をたきしめたものであると知りながら、何ともいえない好い匂いには、きつと心がときめくものだ。

久米の仙人が、物を洗う女の脛の白いのを見て、神通力を失ったというが、本当に、手足や肌などが、美しくふつくらとつやつやしているのは、色の中でもほかから持っていて付け加えた色ではないのだから、それももつともなことだろう。

● 愛欲の惑いだけは、万人共通

〔第九段〕 女は、髪が美しいことが、何より人の目を惹きつけるものであろう。その人の身分や人柄などは、口をきいた様子だけで、ふすまごしであつてもわかるものだ。折に触れて、何げない仕草で男の心を惑わし、総じて、女が気を許して寝入りもせず、身を惜しいとも思わず、堪えられそうもないことにも堪え忍ぶのは、ただ色の道を思うためである。

まことに、男女の愛欲への執着の道というのは、根深く、源も遠いものである。人の六感に訴える欲情というのは数多いが、それらは皆きつぱりと遠ざけることもできよう。しかしその中で、愛欲の悩みだけは止められないというのが、老いも若きも、智者も愚者も変わらないものと見える。それゆえ、女の髪の毛をよった綱には、

大象もつなぎとめられ、女がはいた下駄で作った笛には、秋の牡鹿が必ず寄ってくるという伝えられている。みずから戒めて、恐れ慎むべきは、この愛欲の煩惱である。

● 恋の移ろいは世の無常

〔第二十六段〕 風が吹くか吹かないうちに、散ってしまう花のよ
うに、うつろいやすい人の心ひたっていた歳月を思うと、あの時、
感じ入ってしみじみと聞いた一言一言は、今も忘れられないもので
あるが、それが自分とは違う別世界の人となってしまうような浮き
世のならいは、人と死に別れるよりも、はるかに悲しいものである。
それゆえ、白い糸が別の色に染まってゆくのを悲しみ、道の分れ分
かれになっていくことを嘆いた人もあったということである。堀河

院の百首の歌の中に、

昔見しいもが垣根は荒れにけり つばなまじりのすみれのみし
て

という歌がある。「普通っていた女の住まいを訪ねてみると、垣根のあたりが荒れ果てている。茅花にまじって葶が咲いているばかりだ」という一首の淋しい光景は、そういうことが、実際にあったということであろう。

● 雪の風情を介さない男では味気ない

〔第三十一段〕 雪が趣深く降り積もった朝、ある女のもとへいつてやることがあつて、手紙を送ったところ、雪のことに何にも触れなかつたことへの返事に、「この今朝の雪をどう思うかと、一筆も

お書きにならぬようなひねくれた方のおっしやることなど、どうして聞き入れることができましようか。かえすがえすも情けないお心です。」と言つてよこしたのは、まことにおかしかった。今はもう亡き女であるから、こんなちよつとしたことも、忘れ難いものだ。

● さりげなく相手を見送る女の優雅さ

〔第三十二段〕 九月二十日の頃、ある方からお誘いを受けて、夜が明けるまで月見をして歩いたことがあつたが、ふと思ひ出された所があつて、取次をさせて、中へお入りになつたことがあつた。荒れている庭には露がしげく宿っている所へ、さりげなくたきしめている香の匂いがしめやかに漂つてきて、ひっそりと住まっている様子、まことに趣深いものであつた。ほどよい時間に出てこられた

が、なおも、この様子が優雅に思われたので、しばらく物陰から見ていたところ、家の主は開き戸をもう少し押し広げて、月を見ている様子である。もしも、そのまますぐに引込んでしまったならば、残念に感じたことであろう。逢瀬のあとまでずっと見ている人がいようとは、知りようはずもない。こういうことは、ただ、平素の嗜みによることである。しかし、その人は、間もなく亡くなってしまったとのことである。

● 優しい心遣いをする嬉しい女

「第三十六段」女を訪ねなくなつて久しく、どれだけ自分を恨んでいることだろうかと、自分の怠慢を思い知らされ、一言の言い訳もできない心地がしているところに、女の方から、「臨時の人夫はい

ませんか。ひとりほしいのですが」と言つて寄こすのは、とても思
いがけないことで嬉しく感じるものである。「そのような氣立てを
持つ女こそ、いい女なのだ」と言つていた人があるが、本当にその
通りである。

● 変わり者の娘は嫁にやれぬ

〔第四十段〕 因幡の国に、何某の入道とかいう者の娘が、美貌だ
との評判で、多くの人か求婚したけれど、この女は、ただ栗の実を
食べるばかりで、一向に米の類を食べなかつたので、こんな変り者
は、嫁にはやるわけにいかぬと言つて、親が許さなかつたという。

● 質素な家で密やかに趣き深く住まう女

〔第百四段〕 荒れている屋敷で人も訪ねないようなところに、宮仕えを憚ることがある時分だという女が、一人さびしく籠っていた。そこに、ある方がお訪ねなされようとして、夕月夜のほの暗い頃に、密かにおいでになったところ、犬がひどく吠えたてた。下女が出てきて、「どちらからお出ででしょう」と問うていたが、しばらくして取次を受けてお入りになった。回りの心細げな有様に、どのような日を送っているであろうと、大變氣の毒に思われ、粗末な板敷にしばらく立つておられた。そこに、落ち着いた様子ながらも若やいだ気配がして、「こちらへ」という人があるので、開け閉めの窮屈そうな開き戸から部屋にお入りになった。部屋の中の様子は、それほど荒れてはいない。奥ゆかしく、灯は遠くにほのかにともっているが、調度の美しさなどが目につき、にわかにはたいしたものでは

ない香の匂いが漂っていて、いかにも人の心を惹きつける住居である。「門をしつかりしめて下さい。夜、雨が降るかもしれませぬ。御車は門の下、お供の人はどこそこに」と言う声がすると、「今宵こそ安心して寝られることでしょう」とささやくのも、間近いところなので、かすかに聞こえてくる。

さて、お二人が近頃のことなどを、こまかに話されているうちに、一番鶏も鳴いてしまった。来し方や行く末のことにわたってしんみりと語っていると、今度は、鶏もにぎやかな声でしきりに鳴き立てる。もう夜もすっかり明けてしまったのかしらとお聞きになるもの、夜更けのうちに急いで帰らねばならぬというような場所がらでもないのです、もう少しゆっくりしていらっしゃると、戸の隙間が白らんできた。忘れ難い言葉などを残して、立ち出でなされると、外は木々の梢も庭の草葉も、目にしみ入るように青々と澄みわたった四

月頃の曙で、何とも言いようがなく美しく趣きが深かった。その時のことを思いだされて、今でもその辺りを通られると、その屋敷の大きな桂の木が見えなくなるまで、振り返って見ておられるという。

● 深夜の忍び語り

〔第百五段〕 北側の家の陰に消え残った雪がひどく凍りついていて、置いてある車の長柄にも、霜が大層きらきらと輝いている。夜明けの空には、残る月は冴えてはいるものの、時々雲がかかるといふ様子である。人の気配がない御堂の廊下で、並みの身分とは思われない男が、女と敷居に腰をかけて話しこんでいる様子だが、何事か話しているのか、果てそうにもない。女の頭の形や容貌など、大変美しいと見うけられる上、何ともいえぬよい匂いが、微かに薫

つてくるのも趣きが深い。話の様子も、そのはしばしが聞えてくるのに、何となく心かひかれることである。

● 悩ましき女という存在・・・

〔第一百七段〕 女がものを言いかけてやった返事を、すぐに当意即妙ですることができる男は、そう滅多にはいないものである。龜山院か御在位中、いたずら好きの宮中の女房どもが、若い殿上人たちが参内されるたびごとに、「ほととぎすをお聞きになりましたか」と尋ねて試したところ、何某の大納言とか言う方は、「とるに足らぬ私などには、よく聞くことができませぬ」と答えられた。堀河の内大臣殿は、「岩倉で聞いたようです」とおっしゃったのだが、「これは難がない。とるに足らぬ私などというのはいやみだ」など

と批評し合つたという。総じて、男は、女に笑われぬように教育しなければならぬものである。

「浄土寺の関白殿は、幼少の頃に、伯母にあたる安喜門院がよく教えてさし上げたので、言葉遣いなどがよろしいのだ」とある方がおっしゃったとかいう。山科の左大臣殿は、「身分の低い下女が見ている時でも、大變氣恥しく、心を使わせられるものだ」と言っておられた。女がいない世の中であつたならば、服装も冠もどうでもよいということになつて、おそらく、身だしなみに氣を遣う者もあるまいと思われる。

このように、男に氣を使わせる女というものが、どんなにすぐれたものかと思うと、女の本性は皆ねじけているのである。我執が強くて、貪欲の念がひどく、物の道理がわからず、ただ欲に迷つて氣が變わりやすく、言葉も巧みである。ところが、差支えないことで

も、尋ねた時には言わないから、思慮深いのかと思えば、あきれたことに、聞きもしないのに勝手にしやべり出す。深く思いめぐらして、うわべを飾ることは、男の知恵にまさっているかと思うと、しやべった後にすぐばれるのには気がつかない。素直でなくて、愚かなものは女である。その女の心に気を使って、よく思われようとするのは気が重いことだ。だとすれば、なんで女などに気を使う必要があるというのだろうか。もしかして賢い女というものがあつたとしたら、そういうのは、親しみにくく、面白みもないものであろう。ただ恋心の迷いに身を委ねて、女の心に従うときだけは、やさしくも、面白くも思われることに違いない。

● 見苦しき年配者の振る舞い

〔第一百十三段〕 四十を越してしまつた人で、色めいた方面のことがひよつとしてあるかもしれないが、それがひっそりで行われるならやむをえないことではあろう。しかし、口に出して公然と男女間のことや、他人の身の上のことなどまで、面白がつてしゃべるといふのは、ふさわしくなく見苦しいことである。

およそ聞きづらく、見苦しいことは、年寄りが若い人に交じつて、面白がらせようとしやべつてゐるさまである。つまらぬ身分なのに、世に知られた人々とさも親しいようにいうこともそうだ。貧しい家なのに酒宴を好み、お客を盛んにもてなそうと派手に振る舞つてゐることもまた然りである。

● 終わった恋、実らなかつた恋を想うのが本当の色好み

〔第三百三十七段〕 （中略）

どんなことでも、初めと終りとが特に面白いのである。男女の情愛も、ただ逢い見ることだけがよいというものでもないだろう。逢わずに終わったつらさを思い、はかない恋の契りであつたことを嘆き、長い夜を一人わびしく明かし、遠い彼方にいる人を思いやり、浅茅の茂つた宿に、逢瀬を重ねた昔のことを懐かしむというのが、本当の色を好むということである。十五夜の月が曇りなく照っているのを、千里の彼方まで遠く眺め渡すよりも、明け方近くなつて、待ちかねた月がようやく出たのが大変に趣き深く、青みがかつた様子で、深い山にある杉の梢の木の間を洩れる光や、また、少ししぐれ模様の空のむら雲に月が隠れがちな情景などが、また心に沁みるものだ。椎の木や白檜の木などの濡れたようにつやがある葉の上に、月の光がきらめいているのは、身に沁みて感ぜられ、ものごころがわかる

友がいてくれたらと、都のことが恋しく思われる。

● 時々通う間柄こそ、新鮮で情愛も長続きする

〔第百九十段〕 妻というものは本当に、男が持たない方がよいものである。「いつも独り住みなので」などと聞くと、いかにも奥ゆかしく感じられる。「誰それが婿になった」とか、また「何とかいう女を迎え入れて、一緒に暮らしている」など耳にすれば、まったく幻滅してしまう。特にどうということもない平凡な女であれば、よいと思ひ込んで連れ添っているであろうその心のいやしさが推しはかれる。また、それがよい女であれば、この男をいとおしく思つて、わが仏尊しと大事にしているのである。そんなところだろうと思われるのだ。まして、家事を切りまわしている女は、まこと

に味気ない。子供などができて、可愛がって育てているのなどは興ざめである。男が死んで後、尼になって年をとっている有様は、死んだ後までも浅ましいことだと思われる。どんなよい女でも、朝晩一緒に暮らしていると、気に添わないことも出てきて、憎く思うようにもなるに違いない。それでは女にとっても、心が虚ろな思いをすることになる。だからこそ、別々に住んでいて、時々通ってゆくというようにすることによって、年月を経ても、仲が絶えることがない間柄となるであろう。ひよっこりやって来て、そのまま泊ったりするならば、きつと新鮮な感じがするに違いない。

● 夜陰の風情の雅やかさ

〔第百九十一段〕 夜になつては、ものが見栄えがしないという人

は、まことに情けないものだ。すべての物の輝き、飾り、色調などは、夜の方こそ見事に見えるのである。昼は、簡略で地味な恰好でもいいだろう。しかし、夜は、きらびやかで華やかな服装が大変ひきたつのである。人の様子も、夜のともし火の光の下で見た方が、一段と引き立ち、物を言っている声も、暗い中で聞いてこそ、心遣いのほどが感じられて奥ゆかしい。香の匂いも、楽器の音も、ただ夜のほうが、一段と結構なものである。これといって格別のこともない夜更けに参上した人が、綺麗な様子をしているのが大変よい。若い者同志で、互いに気をつけて見合っている人々は、時間の別なく注意しているものなので、特に寛いでいるような場合には、普段のときと晴のときとの区別なく、きちんと身嗜みは整えておきたいものである。美しい男が、日が暮れてから、頭の髪をなでつけ、女も夜が更ける時分にそつと座をはずして、鏡を取りだして顔の化粧

などを直して出てくるのも、風情があつてよいものである。

● 色を解さぬ無粋な男？

〔第二百三十八段〕 (中略)

一、涅槃会の日である二月十五日、月のあかるい夜がすっかり更けてから、千本の釈迦堂へお参りして、そつと後ろから入つて、一人で顔を深く隠して説法を聴いていた。そこに、しとやかな女で、姿や匂いが特別すぐれている人が、分け入つて来た。私の膝に寄りかかると、たきしめた香の匂いなどもうつりそうな気配だから、具合が悪いと思つて、座をずらしたところ、なおも寄つて来て、同じ様子なので、立つて出てしまった。

その後、ある御所に勤めている古参の女房が、とりとめのない話

をしていたついでに、「あなたは、まったく無粋な方だと、お見下
げ申したことがあったのです。つれない人だとお恨みになっている
人がおります」と言い出されたが、私は「一向によくわかりません」
と申して、そのままになったことがある。これは後になって聞いた
ことなのだが、あの説法を聴きに行った夜、お局の中から、さるお
方が私をお見つけになつて、お付きの女房を、入念に化粧をさせて
お出しになつて、「あわよくば、言葉をかけるがよいぞ。その様子
を戻ったら報告せよ。大変面白いことだろう」と言つて、画策をさ
れたのだそうである。

● 障害をともし乗り越えてこそ深まる男女の情愛

〔第二百四十段〕　しのぶの浦、くらぶの山といった古歌にあるよ

うに、人の見る目が煩わしく、また、暗闇にまぎれて逢おうとしても見張っている人が多いという中で、何としてでも通おうとする恋の情愛こそ実にあわれと思う節々のことを、後に忘れ難く思うことも多いであろう。それに対して、親兄弟が許して、一途に迎えて家においた女というものは、大へん面はゆいものに違いない。世の中を暮しかねているような女が、不似合な老法師や、いやしい東国人であつても、富裕なことに心惹かれて、「誘つてくれるものがあるならば」などというのを、仲人が、どちらにも気を持たせるように言いつくろつて、互いに知られもしない女を、迎えとつて来たといったようなのは、味気ないことだ。そういう女の場合、いったいどういふことを話の糸口にするのだろうか。長い年月の、茂つた山を踏みわけて来たような恋路の苦労などを互いに語りあつてこそ、尽きることがない物語ができるのであろう。万事、他人が世話

をしたような結びつきは、甚だ気が進まぬことが多いであろう。それが身分のよい女であつても、身分が低く、容貌も劣り、年もとつているような男は、「こんな自分のような卑しい男のために、あなた女が一生を無駄にするはずがあるうか」と、女に対して蔑む気持ちが生じるだろうし、また他方で、女に向い合つていても、自分の姿が恥しく思われることであろう。これでは何とも味気ないものである。梅の花が香ばしく匂う春の夜の朧月の中にたたずみ、御苑の草の露を分けいでてのぼつて来る有明の月の空をながめて、わが身のかつてのことを偲ぶこともないような人は、初めから男女の情愛などに思いをかけないに越したことはないのである。

● 名誉欲、色欲、食欲という三つの煩惱

〔第二百四十二段〕　いつまでも人間が逆境と順境とに追いまわされることは、ただ苦樂のためである。樂というのは、誰でも好み愛するものだ。これを追い求めて止む時はない。その樂を欲するものの第一は、名譽である。名譽には二種類ある。行いが立派だということ、才芸がすぐれているというものである。第二には色欲、第三には食欲である。人間のすべての願いは、この三つにまさるものはない。これは、人間の世の真理をさかしまに見る考えから起つたもので、多くの面倒を引き起こす。樂欲を求めないに越したことはないのである。